



社会福祉法人 聖隷福祉事業団
総合病院 聖隷三方原病院
聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558
静岡県浜松市北区三方原町3453
TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功
編集者 横地健治

2017年5月1日

乳児の世界

横地健治

重症心身障害の多くは有意な言語理解がありません。健全小児でも1歳以前では、ことばを聴いても理解はできません。両者を安易に同一化する事は危険ですが、重症心身障害児者の内面を知るために健全乳児と対比することは有益です。そこで、1歳になる前にどんなことが起こっているのかみていきます。対人交流の始まり・いないいないバアー・ひとみしり・指さしを取り上げて考えてみます。

2カ月になると、相手を見つめながらほえんだり、ほほえみかけられたことに反応してほえむことがみられてきます。これをもって、他者との意図的な関わりが開始されたとします。P・ロシヤは「乳児の世界」(ミネルヴァ書房)の中で、「2カ月革命」と呼んでいます。これと同じような母児交流をメアリー・キャサリン・ペイトソンがProto-conversation (日本語に訳せば「原一会話」と呼んでいます(ヴァスデヴィ・レディが「驚くべき乳幼児の心の世界」(ミネルヴァ書房)のなかで記しています)。この関係は、やまだようこの「うたうコミュニケーション」(ことばの前のことば)新曜社)そのものだと私は思います。これは、乳児が自分の持っている心と同じ心をもった他者の存在に気づき、心を共鳴させているものと考えられます。どうして共鳴させるかというと、人の心はもともと共鳴を欲するようにできているからだとは考えます。なお、この関係にはことばは介在しませんが、ことばの意味世界を造る前提だと考えられています。

こうした関係は重症心身障害ではどうでしょうか。対面して目と目が合い、相手が自分に関心(恐れ・警戒ではなく)を持ったと対面者が感じたならば、「原一会話」は成立したと考えます。こうした関係がとれる重症心身障害児者は多いと思います。ところで、視覚障害のある重症心身障害ではこうはいきません。触ったり、声をかけた後の振る舞いの変化でこれを感じるしかないと思います。視力に問題のない人(職員)にはこれは難しいことですが、意識して感度を高めてこの表出を受け取らねばならないと考えます。

4〜5カ月になると、いいないないバアーを喜ぶようになりません。ものの消失と出現のくりかえしを楽しむものです。この基礎には、消えた物と再度現れた物が同一であるという認識が必要です。また、その場にある物が隠されても存在し続けるという認識もなければなりません。隠された物がやはりそこにあることを発見することは快感のようです(健全者でも心地よいことです)。これに加えて、バアーのはやし言葉の音声が伴っていないければ喜ばないようです(「ことばの前のことば」)。聴覚世界は視覚世界より早く発達することからして(前々回の本通信)、これは納得できます。いいないないバアーは人生最初の音楽つきの観劇経験かもしれません。

それでは、重症心身障害では、いいないないバアーは楽しめるでしょうか。遮蔽されても物はある続けるという認識がなければ、これは楽しめないでしょう。この認識があれば、いいないないバアーのような「あるーない」の転換は楽しみの素材となると思われます。また、それにあつた声や音を加えた方がいいでしょう。

8カ月になると、ひとみしりをするようになります。見知らぬ人を見ると泣くようになるという事です。これは顔認知の発達という一面をみるだけではなく、見知らぬ人の登場する場面の総合的理解が増したと考えるべきです。私の経験では、1歳代までひとみしり泣きの激しい早産の痙性両麻痺児(脳性麻痺の1タイプ)は、その後はすべて親しみやすい子に様変わりしています。反対に、ひとみしり泣きのない子は、自閉症スペクトラムになっていくことは多いようです。こうしてみると、ひとみしり泣きは対人理解と格闘している積極的営みと理解すべきです。重症心身障害でも、ひとみしりを認めたら、対人関係とその場面の理解に取り組んでいるとして、次の展開を期待して待てばいいと思います。

9カ月になると指さしが登場してきます。これは、他者と物を共有する三項関係の開始を表しています。これは画期的なできごとであり、「9カ月革命」と呼ばれています(マイケル・トマセロ「心とことばの起源を探る」(勁草書房)、前述の「乳児の世